



# GRL NEWS

Gender Research Library  
Nagoya University

名古屋大学  
ジェンダー・リサーチ・ライブラリ

## No.2

2018年7月発行

## ハーバード大学ナンシー・F・コット教授による 開館記念企画を開催しました

名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリでは、公益財団法人東海ジェンダー研究所との共催事業として、2018年3月下旬から4月上旬にかけてハーバード大学教授でアメリカ女性史研究の第一人者であるナンシー・F・コット先生をお招きし、開館記念講演会および一般公開セミナーを開催しました。いずれも学内外の多くの方にご参加いただき、廊下まで聴衆があふれ出すこともありました。

開館記念講演会「女性史の過去と未来」(3月24日)においては、コット教授が女性史の成り立ちとそれが学術研究として定着するまでの困難、そして今後の展開の可能性について話をされました。とりわけ、「歴史が社会を支えるために不可欠であるように、女性史はすべての女性学の基礎になりうる」という言葉には、女性史を切り拓いてきたコット教授ならではの強い信念が窺われました。

また、一般公開セミナー「図書館とジェンダー」(3月27日)においてコット教授は、長年ハーバード大学ラドクリフ研究所所属のシュレジンガー図書館の館長を務められた経験も交えつつ、女性図書館の設立が女性運動と不可分な一つの運動であったことを歴史的に語られました。さらに、女性図書館がその存在意義を打ち出

すためには、図書館が収蔵方針を定めることが必要であるとも指摘されました。これはジェンダー専門図書室としてのGRLの今後のあり方を考える上でも示唆に富むものでした。

コット教授は婚姻史についての専門家でもあり、その知識を元にしたセミナーが「結婚と家族制度」(3月29日)でした。このセミナーでは、結婚が私的なものであると同時に公的な性格を持つものであり、そして結婚によって権利義務関係を伴った「市民」が形成されるがゆえに、結婚は常に国家にとっての関心事であったということが示されました。セミナー参加者との議論では、そもそも結婚の本質をどこに見たらよいかという論点まで掘り下げられました。

最後に、現在ジェンダー論にとっての喫緊の課題となっているテーマについて、コット教授は「セクシュアリティとジェンダー」(4月4日)と題して講演されました。コット教授はセクシュアリティが非政治的なものであるという想定を批判しつつ、ここ数十年の間にLGBTQの権利を求める運動がどのように変遷したのかをスライドとともに示されました。

コット教授をお招きした開館記念講演会とセミナーでは、コット教授と参加者

の研究者・学生との間で活発な議論がおこなわれ、GRLがジェンダー研究の拠点として新たな知を創造するための役割を果たせることが示されました。

(文責:西山真司)



## 開館記念企画 参加者の声

GRLで行われた開館記念講演会で聞いた、ナンシー・F・コット先生の講演は私にとって、大変勉強になりました。私は現在、昭和初期の婦人雑誌における「良妻賢母」のイメージについて研究しています。そのため、ジェンダー研究の先駆者であるコット先生のご意見をいただけるのはとても貴重な機会でした。その上、今回の講演会は、ジェンダーに興味を持っている参加者たちと交流する素晴らしいきっかけにもなりました。

今回の講演会で改めて「ジェンダー」という概念をさらに深く検討し、理解する事の大切さを実感しました。とりわけ「女性史の過去と未来」や「結婚と家族制度」などのテーマについて得た知識と観点を今後の研究に活かしていきたいと思います。

Genevieve Tan  
(名古屋大学G30プログラム 学生)

Cott先生に「Gender and Library」についての講演を東京大学でも日本滞在の最後をお願いしました。その講演のアンケートに「図書館と言う存在を甘くみていたと言うことを痛感しました」と記述がありました。ライブラリアンアンは、どうしても今の図書館の「在り方」にこだわりますが、Cott先生は、アメリカの女性史を背景に、なぜ、Women's Libraryが必要であったのか、現代社会を反映したコレクション蓄積、人間が生きた記録を未来に繋ぐ戦略を話されたからでしょう。私も長い人間の歴史の中の図書館の「存在」、women's libraryの「存在」の意味をあらためて思いめぐらしながら、お話を聞いていました。「存在」の意味を考えるとこそ「gender」視点だったと、先生とのご縁をうれしく思い出しながら、今にして思っています。

青木玲子  
(国立女性教育会館 客員研究員)

私は、ナンシー・コット先生による開館記念講演会と、それに続いて行われた3回のセミナーに参加させていただきました。

私はジェンダー論に興味を持っていますが、政治学におけるジェンダー研究の文献を中心に読んできたため、コット先生が専門としていらっしゃるアメリカ女性史は、あまり馴染みのない分野でした。しかし、このような私にとっても、コット先生のお話は非常に興味深いものでした。特に「従来の歴史学で不可視化されてきた女性の存在を明るみに出すには、これまでに歴史とみなされてきたものを問い直し、その範囲を広げることが重要だった」という指摘は、まさにそのような試みの先駆者であるコット先生だからこそ、とても力強く感じられました。それと同時に、政治学においてもジェンダーに焦点を当てることの重要性を再確認することができ、今回の講演会は貴重な機会となりました。

左高慎也  
(名古屋大学法学研究科 M1)



2017年度末から2018年度初めのちょうど桜が満開の頃、名古屋と東京で開催されたナンシー・コット教授によるレクチャーシリーズのほぼすべてに出席することができた。どのレクチャーにも共通して感じこはコット教授の強い求心力だった。コット教授の専門であるアメリカ史だけでなく、日本史、フランス史、イギリス史、あるいはアメリカ文学、東アジア研究等、多様な分野で活躍してこられた研究者が一堂に会するような講演会であったからだ。開館記念講演後、分野を超えて交流する女性史・ジェンダー史の先達世代の会話は、オーラル・ヒストリーとして残したい内容でもあった。大学院生や留学生ら若い世代から発せられる鋭い質問にも感銘を受けた。コット教授の研究が

日本においても広く研究者や大学院生に影響を与えている証左である。レクチャーシリーズを主催して下さったジェンダー・リサーチ・ライブラリに深く感謝したい。

高橋裕子  
(津田塾大学 学長)

「アメリカ女性史研究の重要な本は？」と聞かれたら私はすかさず、Nancy CottのThe Bonds of Womanhood (1977)をあげると思う。それまでの女性解放運動の指導者であるエリート女性中心の歴史研究から中産階級の普通の女性の社会史へと新しい流れを作ったと言える。この本は、「女性の領域」の中に縛られて(bonds)体験を共有しながら生まれた女性同士の連帯(bonds)がフェミニズムの萌芽になったということを実証的に示し、その後のアメリカ女性史研究に枠組を与えた。今日では、この枠組の「普通」の女性は白人であることが批判され、黒人やアジア系が女性史において重要な位置を占めるようになってきているが、アメリカ女性史がエリート女性から普通の女性へと視点を広げていったことは重要である。

今回名古屋の講演では、そんなコット先生の名著を可能にしたのはハーヴァード大学の女性図書館だったということを知り、名もない人々の資料の保存、そして図書館の重要性を改めて感じた。今後のジェンダー・リサーチ・ライブラリの役割に期待する。

有賀夏紀  
(埼玉大学 名誉教授)



## 「男性史」を不可視化させる男性社会と歴史研究

隠岐さや香

私は18世紀フランスの科学史を専門としている。研究テーマは、科学者と政治の関わりなど、割と泥臭い内容を扱っている。研究のため、当時の欧州の学者の集うアカデミーなど、教育研究組織についての史料を読むことが多い。いずれも男性社会である。その意味で私の研究は一種の「男性史」といえる。ただ、普段はその事実を意識せず、忘れがちである。うっかりすると彼らにジェンダーやセクシュアリティがあることすら忘れていないかもしれない。

私の研究でも、よく読む関連研究においても、女性達は見えないところに沈んでいる。たとえば、パリ王立科学アカデミーには40名程度の正会員（男性）がいたが、彼らの婚姻関係や性愛関係について集団を対象に調べた研究は管見の限り見当たらない（個々の伝記記事ならあるが）。会員たちの宗教的傾向や身分、元の職業を統計的に扱う研究はあるにもかか

わらず、である。

この状況は、18世紀の女性知識人を扱う場合のアプローチと比べると恐ろしく違う。その人の家族関係、特に婚姻あるいは愛人関係（異性愛）にまつわる関係の考察がすぐに行われる。人間関係全般についても男性知識人との交流関係を軸に分析がなされる。女性を扱う研究には男性が沢山出てくるのである。

もちろん、このような差が出る背景には、やむを得ない事情もある。女性の声を伝える史料は男性のものより残りづらい。そのため、残された手がかりを駆使する上で、配偶者や友人である男性側の史料が使われたり、本人の日記からわかる私的な人間関係が詳細に検証されたりすることになる。

ただ、それを踏まえても、男性の知識人や科学者を扱うこれまでの研究は、ジェンダー分析やクィア分析的視点を踏まえた



歴史研究の成果を十分に受け取れていない現状があると思う。たとえば、依然として、男性が女性のネットワークから何を受け取っていたかの分析は貧弱である。また、男性同士の絆がいかなる性質のものであったか、果たしてそれが現代の我々が「友人」や「上司・部下」と呼ぶそれと同じなのかについての考察も多くはない。結果、重大な見落としが存在する可能性もあるだろう。自戒も込めて、そう考えている。

（名古屋大学経済学研究所・教授）

## ジェンダーに関わる偏見・差別

—「悪い」という判断が下される心理的過程—

田中友理

性差別や、セクシュアルマイノリティに対する暴力や嫌がらせは、日常的に経験したり、新聞記事やSNS等で目にするものがしばしばあります。それを見たとき、「不道徳的な行為だ、そんなことをするのは間違っている」と感じる方も多くいらっしゃるかもしれませんが、しかし、そもそもそういった行為が「悪い」と判断されるのはなぜなのでしょう。また、差別をしている人々は、道徳的に劣った「悪者」なのでしょう。私はこの点に注目し、社会心理学の視点から、差別や偏見と道徳観の関連性について研究をしています。

これまで、人が行為の善悪を判断するときには、その行為が「他者を傷つけないか」や「公平であるか」という基準が用いられていると考えられてきました。これらの基準が通文化的に見られる一方で、近年の研究では、こういった西洋的な道徳観以外の基準も用いられていることが

示されています。

例えば、「集団の規範を遵守しているか」や「神聖さや純潔を冒していないか」も、行為が悪いかどうかを判断する基準として使われています。さらに、これらのどの基準を重視して善悪の判断がされるかは、文化や政治的志向によって異なることが明らかにされてきました。

また、「男性のみに遺産を与え、女性には与えない」という行為は、「公平であること」を重視する国では間違っていると判断されますが、「集団の規範を遵守すること」が道徳として重視されている国ではむしろ正しいことだと判断されます。これを踏まえると、差別は時として、「正しいこと」として行われている可能性が考えられます。人々の道徳観が個々の差別とどのように関わっているかを明らかにすることで、「なぜ『悪いこと』とされる偏見や差別が今日まで維持されているのか」とい



う問いに対する答えを見つけることができると考えています。

ジェンダー・リサーチ・ライブラリには、ジェンダーを切り口として、幅広い分野の文献が所蔵されています。自身の研究対象を、ジェンダーという観点から改めて眺めることで、新たな気づきが得られるのではないかと感じています。

（名古屋大学情報学研究所・D2）

## お知らせ

### 2018年度 ジェンダー研究集会開催助成金について

名古屋大学GRLでは、ジェンダー問題に関連した研究集会の開催費の一部を助成する事業を行います。この助成金は、国内外のジェンダー問題に関する研究の普及・推進を目的とした研究集会について、開催費の一部(但し飲食を除く)を助成するものです(1件につき20万円を上限とし、年間3件程度)。

#### ■申請資格団体

ジェンダー問題について研究する団体及びグループ  
 ※ただし、申請者(開催責任者)は、学生・研究員・教職員等、名古屋大学構成員とします。

#### ■申請の方法

詳細につきましては、名古屋大学GRLのホームページより、「NEWS」→「2018年度 ジェンダー研究集会開催助成金について」をご覧ください。  
 (<http://www.grl.kyodo-sankaku.provost.nagoya-u.ac.jp/>)

#### ■募集期間

2018年7月2日(月)～7月31日(火)

### 水田珠枝先生によるフェミニズム基礎理論講座について

名古屋大学GRLでは、下記の日程で水田珠枝先生(名古屋経済大学名誉教授・公益財団法人東海ジェンダー研究所顧問)によるフェミニズム基礎理論講座を開講いたします。参加費は無料で、どなたでもご参加いただけます。

#### ■日程および時間

2018年 9月14日(金) 第1回「フェミニズムの生誕 ——18世紀」  
 10月12日(金) 第2回「フェミニズムの論争 ——19世紀、功利主義とマルクス主義を中心に」  
 11月 9日(金) 第3回「生産と再生産の再構成 ——20～21世紀、個人・家族・社会および国家」  
 いずれも、16時30分開始(19時30分終了予定)  
 場所/GRL2階会議室



## ご寄附のお願い

GRLは、ジェンダーに関する研究、教育、研究者の育成、ならびに男女平等意識の啓発、普及に向けて、フェミニズム、ジェンダー研究に関わる図書、雑誌、リーフレットやパンフレットなど、多様な文献、史・資料を蒐集・保存するとともに、研究者はじめ学生、市民など多くの方々に利用いただくことで、ジェンダー研究を実践的に発展させていくことをめざしています。

GRLのようなジェンダーをテーマとした研究活動施設は全国的にも珍しく、その個性的でユニークなありかたは、21世紀の知のパラダイム・チェンジに貢献しうる大きな可能性を有しています。GRLがジェンダー研究を深化させ、その成果を社会に還元できる知の拠点へと成長していくためには、文献、史資料を散逸させることなく、蒐集、保存、整理し、広く提供できるライブラリ、アーカイブの存在が不可欠です。

GRLが、先人たちの知の営みを次代に継承していけるよう、みなさまのご支援を賜りたく、お願い申し上げます。ご寄附金等をいただける場合には、こちらのメール([grl@adm.nagoya-u.ac.jp](mailto:grl@adm.nagoya-u.ac.jp))までお知らせ下さい。



お問い合わせ: [grl@adm.nagoya-u.ac.jp](mailto:grl@adm.nagoya-u.ac.jp)

電話: 052-789-5111 (代表)

アクセス: 〒464-8601 名古屋市中種区不老町  
 地下鉄名城線「名古屋大学駅」1番出口より徒歩1分